

ラダッシュ
村

の

第七
異世界



蝉川夏哉

Illustration = はみ

*The Radash Village in
frontier NO.7
Natoya Semikawa Presents
Illustration = hami*



星海社
FICCTIONS

第七異世界のラダッシュ村

蝉川夏哉

Illustration／はみ

星海社

草の匂いが強い。

白毛の大狗ルに跨りまたが、ロランは山中の旧道を駆けていた。

雨季が明けて半年。山々の緑は初夏の陽射しひざせを受けて青々と萌えている。

木漏れ陽の明るい照葉の山林は遠乗りにはもってこいの場所だが、今日のロランは愉たのし
んばかりもいられない。

長く伸ばした黒髪が風に靡なびく。

部下の狗いぬは引き離し、とうに姿が見えない。父から命じられた巡察の任は焦る必要のな
いものだが、まだ十八と歳若いロランは昂たかぶりを抑え切れずに狗を走らせた。

ロランの目当ては、噂うわさの異人オロンユだ。

見慣れぬ装束を纏まとった五人組。

彼らは、耳慣れぬ言葉を話し、不思議な道具を使いこなす。

その噂が流れはじめたのは四ヶ月続いた長雨の上がつてすぐのことだった。

現れたというのは南楼王国アルゴの辺境、ロランの父が治めるリウ荘そうの更に外れ、エテル郷。

この五十年ほど、ほとんど忘れ去られたような土地だ。

むしろ、忌いまれていた方が正しい。

ロランは手綱をしごく。悪路を飛ぶように走る大狗の背でリウ荘の次期荘司の胸なみに滾なまるのは、未知への関心と、僅かばかりの猜疑さいぎだ。

「流賊ゴゼルではないか」

最近ふ臥せることの多くなった父の耳元で側近がそう囁ささやいたのを、ロランは知っている。荘には変化を怖おそれる者が多い。殊更むじやうに危機感を煽あおり立て、見慣れぬものはことごとく排除しようとする。人も、物もそうだ。

かつては旅人を温かく迎え入れた荘も、このところは邪険に扱うことが多くなった。

賊がたつた五人で、郷を襲うというのは莫迦ばかげた妄想だ。

それでも、一度は素性を確かめなければならない。

五人は偵察で、仲間の流賊を南から引き入れようとしているという荘民の危惧は解消した方がいだろう。

ロランが頼まずとも父は見回りの任を命じてくれた。表向きはエテルに塾居ちつきよしている父の旧知を訪ねるといふ名目になっている。知らず知らずのうちに考えが顔に出ているのかもしれない。

生い茂る木々を抜けると、一気に視界が開けた。丘の上に出たのだ。眼下げんげには濁にごった大河が流れ、兩岸の段丘には緑に覆われた遺跡が広がっている。

——いた。

古い堂宇ダンカの傍そばで三人の異人が畑を耕している。

網を張ってその中で育てている作物はこれまでにロランの見たことがない赤い実だ。

狗の呼吸を整え、ゆっくりと坂を下る。

敢あえて木陰を避け、相手から見え易いように進むのは無用な警戒を抱かせないためだ。

異人の一人がこちらに気付き、作業の手を止めた。眩まぶしそうに手庇てびだしをしてこちらを見上

げる所作はその辺りの農夫とほとんど変わらない。

確かに見慣れぬ格好だが、これは流賊ではないだろう。郷を襲うつもりがあるのなら、

こんなところで呑のん気に畑など耕すはずがなかった。

ロランが疑いを解いたのは異人の野良姿が無警戒だったからというだけではない。堂宇

から姿を現した老爺ろうやの姿に見覚えがあったからだ。

「セイゲン殿！」

父の旧知である。

ロランが声を上げて手を振ると、向こうも控えめに手を掲げて応えた。

一気に坂を駆け下りる。セイゲンと繋つながりがあるのなら心配することは何もない。

今でこそ呪われた土地に逼塞ひっそくを余儀なくされているが、セイゲンが一廉の人物であるこ

とはロランもよく知っている。

「ご無沙汰をしております、セイゲン老公ルンクン」

げく
「下狗して挨拶をすると老爺は豊かな白髯はくせんを扱しごきながら目を細めた。
「ロラン殿か。父上は御壮健かな？」

どこまでも優しい声音にロランは少し返答を躊躇ちゅうちよ踏ふする。

父の様子はこのところあまりよくない。薬師せんしんや呪術医クルルンも頼んでいるが、施療の効果はあまり捗はかばか々しくなかった。

「最近さいきんは臥せり気味ですが、老公に会いたがっておりました」

「ふむ、そうか」

しみじみと嘆息たんそくし、一度会いに行かねばならんなどとセイゲンが呟つぶやく。

「ところで老公、こちらの方々は？」

ああ、と掌てのひらを打ちセイゲンは手近にいた異人の一人を手招きした。

黒目黒髪の男からは、どこかぼんやりとした印象を受ける。

男はロランに向かって深々と頭を下げた。この辺りでは見ない所作だが、それが彼らの挨拶なのだろう。

異人だ。

噂の通り、見慣れない格好だ。身体からだつきは意外にしっかりしているが、農作業で付く筋肉とは違うようだ。

年の頃は三十代だろうか。ロランと同じような髪の色だが、やはりどことなく纏まとっている雰ふん囲い気が違う。

ウンノケエタロー、と男は名乗った。ニホンという土地から来たらしい。

「リウ・ロランだ。よろしく、ウンノケエタロー」

ウンノケエタロー、とロランは舌頭ぜつちゆうに転がしてみる。不思議な響きだ。

訛なまりは酷ひどいが、聞き取れないほどではなかった。

恐らく語学巧者のセイゲンが手解きをしているのだろう。どこまでの言葉が通じるのか、興味が湧いた。

「ニホンとは聞き慣れぬ地名だな。ルーオの方か？」

尋ねるとウンノケエタローは頭を横に振る。

困った顔をして、ニホンはとても遠いということを身振り手振りも交えて訴えてきた。「方角くらいは分かるのではないか？」

少し悩んでからウンノケエタローが指差したのは空だった。

遥はるか彼方に、支バルフオア天山脈が見える。

雲海よりも遥かに山容を聳そびえさせるあの山々からやって来たというのだろうか。

碧落へきらくの山嶺には言葉の通じない土俗の民が古代からの暮らしを頑なに守り続けているとロランは聞いたことがあった。

「ロラン、どこから来たか分からないからと莫迦にするなよ。こう見えてケイタロウは二ホンでは文書を扱う仕事をしていたそうだ」

セイゲンにそう言われてはじめて、ウンノケエタローが姓名であつたことに気付く。

ウンノ・ケイタロウ。やはり不思議な名だ。

姓と名とを持つのは南楼王国では土地持ち以上の人間に限られるから、知らず長い名だと思ひ込んでしまつたらしい。

「文書を扱う仕事、ですか」

そうは見えない、という言葉葉をロランはすんでのところで呑み込んだ。

文章を扱う仕事ということは、文官なのだろう。

確かに文弱にも見えるがロランの知る文官の理知的な風貌ふうぼうとは違つて見える。

流賊でないことは明らかだが、文官にはもつと見えない。人相見をするわけではないが、こういう人物は文官に向かない気がする。

農作業をしていた他の二人も、流賊には見えない。

一人はウンノと同じく黒髪黒目で背が低い。こちらはクドウと名乗つた。

もう一人のオブライエンという男は髪が金色で目が蒼あおかった。

色瞳人だ。

遙か南西のルーオに暮らす人々は目に色があるということをロランは知識として知つて

いるが、実際に目にするのははじめてのことだった。

「クドウはニート、オブライエンはトシケイカクプランナーだそうだ」

「トシケイカクプランナー……」

セイゲンの口にしたトシケイカクプランナーとはどんな仕事なのだろうか。オブライエンという大柄な色瞳人を見ても、まるで想像が付かなかった。

今は釣りに出ていてここにはいないが、他にも二人の異人がいるという。

だが、そんなことよりもロランの目はクドウの差し出した真っ赤な実に釘付けになって
した。

赤い。こんなに赤い作物は、リウ荘では見たことがない。

瑞々しく熟れた実に、ロランの喉が鳴る。

そういうえば気が逸っていたのか、駆けるのに夢中になって随分と水を口にしていない。

「トマト、というらしい。儂もこの歳まで生きてはじめてお目にかかったが、美味いぞ」
勧められるままに、ロランは赤い実に齧りついた。

皮に歯を突き立てると、中からルジオの実のように汁が溢れてきた。

甘い！

今まで味わったことのない味に目を見開きながら、口の端から垂れる汁を袖で拭う。

ただ甘いだけの果実ならあるにはあるが、このトマトという実には酸味もある。

それがまた、渴いた喉には嬉しいのだ。

一息に食べ終え、ロランは行儀悪く指先を舐る。

これは売り物になるに違いない。荘司の息子としての勤がそう告げていた。

それに、農法。

トマトの畑の周りに霞み網を吊ってあるのは鳥除けだろうか。

こういう知恵があるのなら、この異人たちと交流を持つことは荘の利益になるはずだ。

ロランは自分が興奮していることに気が付いた。

父親の補佐で押し殺していた自分の中の青年らしい部分が疼いている。異人に、純粹な興味を抱いているのだ。

ロランは改めてウンノたちに向き直ると、核心となる疑問を口にした。

「ところで一つ聞きたいことがある。お前たちはここでいったい何をしている？」

流賊ではないだろう。それは話していてもよく分かる。

移民ならまだしも、彼らが南の大国ルーオからの逃亡民である可能性はあった。

ちらりとセイゲンの方を盗み見る。

北のケイ帝国から遠流されて来たこの老爺をロランは厄介だと感じたことはない。

だが、この上にルーオからの逃亡民も抱え込むことになると、次期荘司としては色々と

考えなければならなくなる。

さらに北へ逃げたいというのなら、問題にならない範囲で手助けをしよう。

商いをしたいのなら、荘として応えることができるかもしれない。トマトにせよ農法にせよ、彼らの持っているものは興味深いものが多いのは事実だ。

少なくともこの呪われた土地に住むことは彼らとしても本意ではないに違いない。

ウンノは小さく咳払いをし、少し照れながら宣言した。

「ここに、村を作ります」



לִיטוּ נְפֻטְלִיךְ טוּ פֿאַררן ווּן שפּאַטן פֿאַר

第

The Radash Village in frontier NO.7

Natsuya S. n'kawa Presents

Illustration - hami

七

異世界の

ラダッシュ村

蝉川夏哉

Illustration = はみ

Design = KOMEWORKS

The Radash Village in frontiers NO.7 Characters



ミクリ

ミクリ

一行が第七異世界で最初に出会った異世界人。年齢は一〇代前半か。エテル郷の郷長が預かっていた。



海野啓太郎

うんの けいたろう
海野啓太郎

フリーライター

第五異世界入植団の交代要員に随伴する、密着取材の仕事を得る。大学では言語学を専攻していた。何を食べても腹を壊さない鋼鉄の胃袋の持ち主で、料理も得意。



DAIICHI
O'BRYEN

だい ち

大悟・オブライエン

都市計画プランナー

建設要員として第五異世界に派遣されることになっていた。肉体派だが寡黙で思慮深く、責任感が強い。趣味は日曜大工。



BAIBA
RYOUSUKE

ば ば りゅう すけ

馬場龍介

考古学者

異世界考古学分野においては、日本でも五指に入ると言われる優秀な若手研究者。真面目で何ごとにも前向き。人並み外れた豪運の持ち主でもある。

The Radash Village in frontiers NO.7 Characters



AGUSAI
TEHOYT

かすが りょう へい
春日涼平

内科医

異世界開発財団の奨学金を受けていたため、応召義務があった。三度の飯より釣りが好きで、入植地近くに溪流があると聞いて第五異世界行きを承諾した。



HAKUJIT
JINCON

く どう ふゆ き
工藤冬樹

ニート

実家は農家だが、家業は兄が継ぐため、家族の画策で異世界行きを志願することになった。とにかく好奇心が旺盛。頭にタオルを巻いていることが多い。

NESTAN



セイゲン

エテル郷近くの堂宇に隠棲する、鶴のように痩せた老人。非常な教養の持ち主で、故あってこの地にあるらしいが……。

LIJOL
TIL



リウ・ロラン

なんろう
南楼王国の辺境八ヶ郷を束ねる荘司の跡取り息子。狗に騎乗し、弓を能くする。

WOTJL

メイファ

南楼王国に八つある郡王家の一つ、キムウ糺郡王家の八女。開明的・理知的な王女で、こ〈国せん姓姫〉として父の政務を補佐する。



第一章

The Radakic Village in Frontier NO.7

Chapter 1

事の発端は、クリスマスの前日にまで遡る。

「うまい話があるのよ」

久しぶりに再会した先輩は開口一番そう言った。

年の瀬も押し迫った新宿。東口を出てすぐの喫茶店にはカップル客が多い。

先輩の言葉を聞いて、僕は心の底からがっかりしてしまった。

この世の中にうまい話など存在しない。

駆け出しフリーライターとして泥水を啜るような生き方をしている僕が知っている数少

ないこの世の真理だ。

特にこの先輩の口からうまいだけの話が出ることだけは、絶対にありえない。

財布の中に福沢諭吉どころか樋口一葉すら一人もいない今の状況では、うまい話よりも

堅実な話を聞かせて貰いたかった。

何ヶ月ぶりかの連絡を受け、貸したままになっている二万三千円を返してくれるものと期待して大宮からのこのこと出て来た僕が間違いだっただの。

先輩を睨みつける。僕がまだフリーライターになる前に働いていた編集プロダクション

で紅一点兼女傑として君臨していた先輩は、相変わらざる美人だった。

「ねえ海野^{うんの}くん、そんなおつかない顔しないでよ。別に君を騙^{だま}して売り飛ばそうっていうわけじゃないんだから」

「じゃあ先に二万三千円返してくださいよ。話はそれからです」

それとこれとは話が違うんだよ、とぼやきながら先輩はセブンスターに火を点ける。

重要案件を全部放り出して夜逃げしたあの時と、タバコの銘柄は変わっていない。

喫茶店の天井に捉えどころのない紫煙^{しえん}がふんわりと立ち上った。

「〈第五^ダ異^イ世界^コ〉の取材、行ってみない?」

「〈第五^ダ異^イ世界^コ〉、ですか」

アームストロング隊長が一九六九年に〈第一^ダ異^イ世界^チ〉に小さくとも大きな第一歩を印してから今年で五十年。

人類はこれまでに六つの異世界を発見し、順次入植を開始している。

中でも〈第五^ダ異^イ世界^コ〉では温暖で農耕に適した土地に入植地を確保できたことから、日本政府もかなりの額を投資しているという話だった。

お堅い新聞から電車の中吊り広告にのる怪しげな週刊誌の見出しにまで〈第五^ダ異^イ世界^コ〉という文字がのらない日はない。

それだけの重大な国家事業ということだ。

二〇二〇年のオリンピックをイスタンブールに奪われるかなり前から、日本政府は異世界開発にかなり傾倒している。

「大手出版社からの依頼で城南大学の異世界考古学チームを取材するはずだったライターがね、急遽辞退することになってさ。杵が浮いてるの。板垣・馬場研って名前くらい聞いたことがあるんじゃない？」

「同行取材って、凄いいじゃないですか。それも板垣・馬場研」

異世界考古学というのはここ数十年で急速に勃興しつつある学問領域だ。

これまでに人類が発見した六つの異世界には残念ながら知的生命体の姿はなかった。人の存在に淡い期待を抱いていた人々は失望したが、望みが全く絶えたわけではない。

遺跡は残っていたのだ。

彼らがどこかへ去ってしまったのか、あるいは滅んでしまったのかは分からない。

それでも痕跡が残っていた以上、人類はこの広い世界に一人ぼっちではなかったということになる。

そんな異世界考古学の分野でも板垣・馬場研と言えば有名だ。特に三十四歳の若さで准教授になった馬場龍介は次々と画期的な発見をしている俊英だった。

学術的な関心も高いが、一般人の興味も強い。

このジャンルで本を出すことができれば、ライターとしての名は上がる。

三年、いやうまく立ち回れば五、六年は食いつばぐれずにすむだろう。

特に〈第五異世界〉というのが素晴らしかった。

〈第五異世界〉の日本人入植地近くでは巨大な異世界文明遺跡の発掘が続いている。

取材に同行できるなら、確かにこれほど面白い話はない。

「ね、うまい話でしょ？」

運ばれてきた珈琲^{コヒ}を先輩が啜る。

「出発は年が明けて二月の終わりで、期間は半年。〈第五異世界〉の周期だと経済的に世界窓を開けるのは三ヶ月に一度らしいのよね。同行取材は二期半年の枠が確保されてる」

「二月に出発で、半年……」

買ったばかりの来年の手帳にメモを取っていく。

二〇二〇年の大口の予定はまだ真っ白。このままではまずいと思っていた時期にこの話は渡りに船だ。

半年の取材旅行。出版社からの謝礼も出る。

真面目に取材すれば数年困らないだけの飯^ネの種。

そして異世界入植者への人脈^{コネ}も作れる。

〈第五異世界〉の入植地では都市計画まではじまっているというから、考古学以外にも色々な取材ができそうだった。

フリーライターの仕事というのは、昔ながらの漁師と似ている。

大漁のときは大漁だし、釣れないときは何をやっても駄目だ。

食い続けるためには稼げる漁場を知っているか、魚群を追う必要がある。

今の〈第五異世界〉は僕のような零細フリーライターにとつては竜宮城のような漁場だ。

魚は多く、競合相手は少ない。

断る理由はなかった。むしろこちらから頭を下げてお願いしたいくらいだ。

映像でしか見たことのない異世界への憧れも、もちろんある。

僕は、柄にもなくわくわくしている自分に気が付いた。

岐阜高山の奥地よりも異世界の方が近い時代になったとは言え、〈第五異世界〉にはまだ

まだ未知の部分が多い。

常時接続されていない〈第五異世界〉と〈第六異世界〉は、人類に残された僅かな

未知の土地テラ・イン・コグニタということになる。

今のところ〈第七異世界〉が見つかっていない以上、フロンティア・スピリッツを發揮

できるのも今世紀が最後、ということにもなりかねなかった。

ただここでだくだく諾々と仕事を譲って貰うつもりにならなかつたのは、先輩に痛い目を見せら

れたからだ。

僕がお人好しなのが原因かもしれないが、先輩も相当ひどい。

自信過剰で傲慢^{ごうまん}で強欲。その上に危機察知の能力だけは抜群で、危ない橋をひらりひらりと渡つてのける。そんな人間からの仕事を警戒せずに請けるようでは、フリーのライターとしては生きていくことなどできない。

僕は両手で持った珈琲カップに口を付けながら、上目遣いに尋ねた。

「で、一つだけ聞かせて貰いたいんですけど」

何でも聞いて頂戴^{ちやうだい}、と先輩は芝居がかった調子で両手を広げてみせる。

「……こんなにうまい仕事、どうして先輩が御自分で請けないんですか？」

二人の間を妙な沈黙が流れた。

他人を蹴落としてでもうまい仕事は持つていくのが先輩のモットーだったはずだ。

しばらく天井を眺め、先輩は観念したように呟く。

「実は、これがね」

広げた右手の薬指に、鈍い光。

三つのリングが重なっているのはカルティエのトリニティ。七十万は下らないモデルだ。

「結婚、ですか」

おめでとうございます、の言葉は尻すばみになった。

婚約もまだなんだけどね、冗談で言ったら指輪までほんと買ってくれちゃった、と幸せ

そうに笑う先輩の笑顔はこれまでに見たことのないほど輝いている。

「私もいよいよ年貢の納め時よねえ」

「いよいよよってまだ二十九ですよね？ 僕の四つしか上じゃないんですから」

ああ、そうね、と目を細めて苦笑する先輩。

お相手は婚活パーティーで引ッ掛けた五歳年上の銀行マンらしい。聴きたくないといっても無理矢理教えられた年収の額は僕が逆立ちをしても到達できない桁だった。

相手は次男坊で将来も両親と同居しなくていいらしいのと先輩がカップ片手に語るのを、僕はぼんやりと聞き流していた。

珈琲がいつもより苦い。

スマホをみるといつの間にか結構な時間が過ぎている。

僕は異世界への同行取材を請けたいという希望を伝え、喫茶店を後にした。

支払いを持ったのは、僕だ。

異世界行きへの話もそうだが、色々と未練を断ち切ってくれたことに対するささやかなお礼のつもりだった。

それから出発までは、地獄のような忙しさだった。

挨拶、書類、事前の準備。

一つ一つのタスクは小さくても、塵ちりも積もれば何とやら。取り掛かったのが年末年始だ

というのも事態を更に複雑にした。お役所はこういう時に小回りが利かない。

まず、先輩の話からして正確ではなかった。

彼女が名前を出したのは業界の巨人のごとき大手出版社だったのだが、実際にこの取材を取り仕切っているのは件の大手出版社の新進気鋭の子会社だった。

出るのも、謝礼ではなく本だという。この点ありがたい。単著を出すのはフリーライターとしての僕の夢だ。

今回は特例で経費は基本的に出版社持ちだという。

熱意と小回りに定評のある担当者のお陰で、準備は随分と加速した。

この担当者と打ち合わせをしながら、取材の準備と異世界行きの手続きを進める。

日本政府や城南大学に提出する申請書類は覚悟していたが、他にも信じられない書類を書かねばならない。全部重ねると週刊少年漫画誌くらいの厚さになってしまった。

履歴書にはじまり持ち込み物品の一覧表やこれまでの病歴、保険の加入証明書に諸々の

念書もある。思想信条についての面談があったのはフランスの入植地に紛れ込んだ無政府主義者が独立運動を起こしかけたからだろう。

予防接種と各種の講習にも時間を食われる。

Webの受講でも修了できると聞かされたのは、全講座の九割方を受講し終わってからのことだった。

海外旅行と違うのは向こうの言語を覚える必要がないことだろう。

〈第五異世界〉を含めこれまでに発見された異世界では知的生命体は発見されていない。

大学時代に言語学を専攻していた身としては、いつか異世界人の言語も学んでみたいという野望がある。それにはまず異世界人を誰かが見つけねばならないのだが。

既に請けていた仕事も終わらせないといけない。

これまでにない速さで原稿仕事を進めるが、どうしても無理なものは友人知人に引き継いでいく。感謝されることもあれば罵倒されることもある。

今生の別れだと飲み会を開いてくれるのはありがたかったが、大体が割り勘だった。フリーライターの生活は、とかく厳しいものである。

異世界行きの日、奇跡的に快晴だった。

僕の家系は四代続く雨男だ。何をするにも必ず雨が降る。今日もその例に漏れないだろうと踏んでいたのだが、杞憂で済んだのは本当によかった。

冬の朝、放射冷却の新宿南口はウインドブレーカーを着込んでいても、かなり寒い。

東富士の異世界接続センターまでは新宿駅からバスで二時間弱の距離がある。

JAWA（国立研究開発法人異世界研究開発機構）のチャーターしたバスは首都高と東名を使って静岡県ごんげんばの御殿場へ向かう。

今回の取材相手である馬場龍介准教授には挨拶をしておきたかったのだが、東富士に前泊したらしい。実はまだ、馬場准教授とは直接会えていなかった。この同行取材が決まった段階で准教授がアメリカにいたからだ。

異世界考古学の〈第五異世界〉に関する分野では論文引用数が世界一という有名人だから、仕方がない。

とはいえ、実際に顔を合わせていないことには若干の不安が残る。

ニューヨークのタイムズスクエアでカウントダウンした後はヨーロッパへ渡り、英仏独伊で講演とスポンサーの協力を取り付け、日本に帰ってきたのは三日前。実家の山梨で一泊して、そのまま東富士に入ったという。

この講演旅行中に新書を一冊仕上げたというのだから、超人的だ。

写真を見る限りでは土いじりでもしていた方が似合いそうな風貌の馬場准教授のどこにあれだけのバイタリテイがあるのかが、不思議でならない。

視界に霊峰富士が入ると、拝みたい気分になってくる。本当に、晴れていてよかった。

これから向かう〈第五異世界〉の瑞穂諸島には大きな山はないというから、こういう風景ともしばらくはお別れだ。

接続センターは元々陸上自衛隊の演習場があった広大な敷地に点在している。

三年前に稼動した中国の天津接続中心に次いで、アジア第二位の巨大な接続施設だ。

ほぼ常時接続されている四つの異世界との人や物資のやり取りのため、日本全国からバスやトラックが引つ切り無しにやって来る。

今回の接続は、それほど大規模ではない。

人員の交替と補給物資の搬入、塵芥じんごと汚泥の回収が中心となる。

新施設の設営用資材が次回の接続に回されたのは一時期話題になった北海道・沖縄・異世界開発省の政務官汚職疑惑が尾を引いているらしいが、詳しいことは分からない。

「トラブル、ですか……？」

一悶着ひとんちやくあつたのは、接続センターに着いてからのことだ。

「よくあるんですよ」

接続直前になって、怖気おどけづいた人が出たらしい。

向こうへ行ってしまうえば、帰って来ることができるのは最短で三ヶ月後。普通は半年後ということになる。

医者や歯科医もいるが、何かあった時の面倒は日本の比ではない。

いろいろな持ち込んで軌道に乗り始めたとは言え、文明と隔絶されているという意味では〈第五異世界〉の入植地と西部の開拓時代は本質的にあまり変わりがなかった。

死亡率こそ低いですが、現代日本で暮らすのとは本質的に違うのだ。

異世界探査初期に訓練された異世界探査士とは違い、今では各方面の専門家や、僕によ

うな一般人も交じっていた。

今回のトラブルの発端は若くして中央官庁を自主的に退職して志願したという元エリートだ。

行きバスでは異世界開拓史に名を残すと大層なことを言っていたが、いざとなると不安が鎌首をもたげてきたらしい。

異世界接続時に事故が発生するリスクについて熱弁を振るい始めたからさすがに良識的な人たちは眉を顰める。一人騒ぎ出せばこういう感情は連鎖してしまうものだ。

士気が低下していいことなど、何一つない。

案の定、四十代の女性と社会派アーティストも元エリートに同調しはじめ。

センターの職員の対応はあくまでも事務的で手慣れていた。

形だけの説得をすると、後は淡々とリストから名前を削除していく。

最終的に三人が異世界行きをキャンセルした。随分と勿体無いことをする。

大昔と違って、異世界接続での事故はほとんど発生していない。統計学者によれば国際線の飛行機よりもよほど安全だった。

一生に一度くらいは地球以外の世界も体験してみたいと憧れる人は多い。

昔は民間人が異世界に行くには莫大なお金を支払う必要があった。

アメリカや日本からではなく、ロシアの接続センターから〈第二異世界〉に数時間だけ

異世界に行くだけで数億円。それでも申し込みは結構あったようだ。

それが今では僕みたいなフリーライターでも取材に同行できるというのだから、技術の進歩は速い。

最近のWeb小説では、人類が異世界ではなく宇宙を目指したという歴史改変ものが好評を博しているという。もし実際にそうだったらどうなっていたんだろうか。

燃料をバンバン燃やして人工天体を軌道に投入する。異世界に接続することと較べると、ちよつとした魔法のように聞こえてしまう。

技術的には可能だと根強く主張する人々もいて、結構な勢力を持っているようだ。

人類がその方向に注力していれば火星くらいには植民していたかもしれない。それはあまりに楽観的過ぎるという反論も見られたこともある。

どちらにしても、今の異世界接続技術のように気軽に帰って来るということはできなかつたというのが界限かいはんでの統一した見解のようだ。

いよいよ接続の時間が来た。

今回は五つの世界窓で接続する計画になっている。

それぞれの窓ごとに部屋は区切られていて、僕が使うのは一番小さな部屋だ。

クリンルームに入るときのようなエアシャワーを潜くぐり抜ける。

異世界旅行が夢物語で無くなつた頃には防疫についても随分とやかましく言われたもの

だが、現在では地球から異世界へ向かう分にはかなり基準が緩和されている。

先進国だけでなく途上国も異世界に次々と入植地を築く中で、段々と緩やかになっていくのだ。完全な防疫設備にはえらく金がかかる。

国際機関の定めた基準を守れと先進国が言えば、異世界資源を独占するつもりかと国連が紛糾するという綱引きを数十年続けた結果がこれだった。

あまり褒められたことではないし異世界環境保護団体は目くじらを立てている。

だが、今ではもうなしくずしだ。異世界探查初期の崇高な理念は次第に過去のものとなり、経済活動としての側面が幅を利かせてくる。こればかりはどうしようもないのかもしれない。

倉庫のように荷物の積み上げられた部屋に入るのは五人。その中には馬場准教授の姿もあった。

「ところで皆さん、自己紹介しておきませんか？」

そう切り出したのは一番小柄な二十代前半の男だった。笑顔に愛嬌がある。

「工藤冬樹、職業はニート。応募した理由は、実家でごろごろしてたら家族に何かしろと言われたから。日本に帰ったらバイク買います！」

ニートでも異世界に行けるんだと驚いたが、社会的地位は僕もそれほど変わらない。岐阜の両親は今でもフリーライターをフリーターの亜種だと思いついでいる。



「俺は大悟・オブライエン。都市計画プランナーです。よろしく」

次に挨拶をしたのは細身のがっちりしたダブルの男だった。アイルランド系の血が入っているらしい。いかにも寡黙な見た目通り、言葉少なだ。都市計画プランナーが異世界でどんな仕事を期待されているのか、後で聞いてみる必要がある。

オブライエンの後は眼鏡の男が引き継いだ。えらく美形だ。

「私は春日涼平、内科医です。趣味は釣りと読書かな。体調不良の時は早めに申し出てくださいね。どうぞよろしく」

春日の私物が大きいのは、中に釣り竿が入っているからだだろう。異世界の魚ならさぞかし釣り応えがあるに違いない。

立っている位置からすると、次は僕の番だ。

「海野啓太郎、フリーライターです。今回は入植地の同行取材ということで一緒にします。ご迷惑をおかけすることもありますが、よろしくお願いします」

フリーライター、という言葉にあまり皆ピンとこなかったらしい。普通に暮らしている限りは、あまり顔を合わせることもない仕事だ。仕方がない。

最後に残った准教授の馬場さんが軽く頭を下げる。柔和な表情だ。

「馬場龍介、といます。職業は考古学者。本当はずっと向こうにいたいくらいですが地球にもたまに顔を出しています。あちらではよろしく」

話には聞いていたが、准教授は少し変わり者なのかもしれない。

全員の挨拶も済んだところで、時間はちょうどいい塩梅あんばいになった。姿勢を固定する椅子いすに深く座り、呼吸を整え精神を落ち着ける。

揺れに気が付いたのは、接続一分前の案内が流れた時だった。

「……結構大きいぞ」

固定の甘かった荷物が崩れてくる。堪たまらずシートベルトを外し、立ち上がった。

揺れはますます大きくなる。

崩れそうな荷物を押さえていると、他の四人もシートベルトを外す。

揺れは次第に大きくなり、立っているのがやっとだ。

「窓が開いてる！」

誰かが叫んだとき、地面が大きく傾いた。

まるで重力の向きが変わってしまったかのように、異世界に向けて開かれた窓の方に床が大きく傾斜している。咄嗟とっさに何かに掴まろうとしたが、無駄だった。

崩れかけていた荷物諸共に、異世界に向けて転がり落ちていく。

「……ああ、やっぱり」

転げ落ちていく先には、激しい雨が降っていた。

僕はやはり、雨男らしい。

第二章

— The Radakic Village in Frontier NO.7 —

— Chapter 2 —



「帰る方法を探しましょう」

僕は洞窟に灯る懐中電灯の明りの下でそう宣言した。

昼でも薄暗い洞窟の外からは激しい雨の音がまだ続いている。

バケツをひっくり返したようなという表現があるが今の雨足はそれよりも酷い。風呂桶か貯水槽でもぶち撒けたような雨だ。

濡れて惨めな姿になった段ボールを開梱し、仕分けしていた四人が僕の方を振り向いた。「帰る？ どうやって？」

医者 of 春日に尋ねられると、僕は即座に答える。

「それを今から一緒に考えるんですよ」

今の僕たちは端的に言つて、ロビンソン・クルーソーのような状態だった。

つまりは漂着者だ。

僕たちを〈第五異世界〉入植地へ連れて行ってくれるはずだった窓は、どういふわけか地上から二メートル半ほどの高さに斜めに開いてしまった。

接続事故。

こんなことはヘルメス十三号窓の事故以来、ここ半世紀ほど発生していない。段ボールと一緒に放り出された僕たちが慌てて手を伸ばした時にはもう、窓は雨空に消えてしまっていた。

東富士の異世界接続センターから誤って、接続された場所がどこなのかは未だによく分からない。ただ、本来の目的地である瑞穂諸島の日本入植地とは違う場所であることだけは間違いなかった。

日本で言えば九州北部と同じような気候帯に位置する瑞穂諸島には十日以上も豪雨が降り続く雨季はないからだ。

雨が降り止む気配はない。まるでベトナム戦争の映画みたいだ。

それに、暑い。

二月の東京からやって来た人間にとっては、耐え難い暑さだった。

降り頻る雨の中を走り回って見つけたこの洞窟に逃げ込んでから、気温が摂氏三十℃を下回ったことはない。

とりあえず雨露を凌げる場所を確保した僕たちが次にしたことは、段ボールの回収だった。ここがどこか分からない以上、生き残るためには物資が必要だ。

永遠に降り続きそうな雨が小止みになったタイミングを見計らって、僕たちは漂着物を

片っ端から掻き集める。

何が入っているかを確認している余裕はなかった。

落ちた衝撃で潰れてしまったものも、雨に打たれて駄目になっていそうなものも、お構いなしに洞窟に運び込む。その作業に、八日かかった。

目に付いたものはあらかた運び終わって、今はその仕分けをしているところだ。

JAWAのロゴマークが刻印された段ボールにはそれぞれ内容を刻示したシールが張ってあるのだが、濡れるとこれがとても読みにくい。

結局、一つ一つ開けて確かめた方が早いという結論に達した。

何故かキャラバンの登山用シューズがたっぷり詰まった箱にマジックで「靴」と書きながら、僕は帰る方法を探そうと皆に訴えたのだ。

「帰る方法、かあ……」

馬場さんが顎に拳を当てて考え込む。

はじめは丁寧語で話していた馬場さんはここ数日でぐっと打ち解けた。作業の間の大富豪がよかつたのかもしれない。

どういうわけか馬場さんはカードゲームが異常に強かった。勘働きがよいのだろう。異世界考古学者には大事な才能なんだそうだ。

「帰る方法の前に、ここがどこかが重要だね」

馬場さんは細い指を折りながら可能性を冷静に列挙する。

「まず、〈第五異世界〉のどこか。瑞穂諸島ではないようだけど、別の場所だという可能性は捨て切れなう」

〈第五異世界〉を含め、これまでに発見されている異世界は全て地球とほとんど同じ大きさの惑星だという共通点がある。熱帯の地方であれば、豪雨の降る雨季のあるところもあるはずだ。

遺伝子プールとして優秀な〈第五異世界〉の熱帯地方はアメリカと中国、それにインドが縄張り争いをしていた。どこかの入植地に近ければ助かる見込みはぐっと高まる。

「次に、〈第五異世界〉以外の異世界である可能性。全球が凍結している〈第六異世界〉ということはないけれど〈第一異世界〉から〈第四異世界〉のどこかかもしれない」

その可能性も、捨て切れなかった。

JAWAの設備は全ての既知異世界との接続に対応している。誤作動が起これば、他の異世界に通じることもあるかもしれない。

「一番ありがたいのは、ここが地球のどこかだということだけだね」

できれば富士山麓辺りなら見つけて貰いやすいと馬場さんが言うと、洞窟に苦笑が広がった。ここが富士の樹海かどこかなら、歩いてでも元の文明世界へ帰ることができる。

「若しくは、ここが未知の異世界だという可能性だな」

馬場さんの顔が、真剣になった。伶俐な横顔は海外の雑誌に載った時の表情だ。

「未知のっていうことは、七つ目の異世界っていうことですか？」

話に食いついたのは工藤君だった。

ニートだというから少し心配していたが、よく気が付くし作業の手際もいい。段ボールの仕分けで一番活躍しているのは一番若いこの工藤君だった。

頭にタオルを巻いててきばきと作業をこなす姿は頼もしい。

「〈第七異世界〉ということになれば、私たちが人類で最初に到着したことになるね」

馬場さんがそう言うのと工藤君がおおと歓声を上げた。

「異世界っていうのはそんなに簡単に繋がるものなんですか？」

春日の質問は、僕も気になっていたことだ。

もしそんなに簡単に異世界が見つかるのなら人類が見つけた異世界が六つだけだということはないはずだ。

「可能性はなくはないかな。既に知られている異世界にはふとした拍子に繋がることがあるし。もちろん、確率はとても低いんだけどね」

その後続く難しい話をよく分からなかったが、地球と異世界が重なり合うことはタイピング次第で起こり得るらしい。

浦島太郎や桃源郷、リップ・ヴァン・ウィンクルの伝説やティル・ナ・ノーグなどは昔

繋がった異世界の伝承ではないかとする学説もあるという（ちなみにJAWAのマスコットキャラクターである亀のジャワ君は浦島太郎の亀をモチーフにしている）。

ほろ酔い気分で居酒屋の扉を開けたら異世界に繋がっていた、なんてことがあってもおかしくないというのはさすがに馬場さんの冗句^{ジョーク}だろう。だが、異世界というのは意外に地球に近いもののようにだ。

自分たちが今どこにいるかによって、帰還のための方法は変わってくる。

五人でいろいろと知恵を出し合ったが、いい考えは浮かばなかった。そもそもここが地球のどこかでない限りは自力で帰ることは難しいだろう。

結局、日本へ帰るためには救助を待つしかないという結論に達した。

救助が来るなら、ここだ。

下手に移動をすると、救助が来ても見つけて貰えないという危険性があつた。

まずは生存が第一。

安全を確保して、余力があれば帰る方法を探す。

方針が定まると、当面の目標も自動的に決まってくる。

段ボールには役に立つものも役に立たないものもたっぷり入っていた。

食糧の備蓄に余裕はあるが、十分とは言いがたい。生鮮食品は早めに食べてしまおう必要がある。すぐに飢えて死ぬということはないが、何年も食い延ばせるほどの余裕はない。

救助がいつ来るか分からないということを考えると、食糧は多ければ多い方がよかった。「種ならたくさんあるみたいですね」

黙々と物資をリストアップしていたオブライエンがルーズリーフをめくりながら報告する。元は〈第五異世界〉の入植地への補給物資だったから、農業用の資材は多い。

「農業で増やすしかないかな」

生き延びるために村でも作るか、という言葉とは裏腹に馬場さんの表情は明るい。

この十日ほどで分かったが、この人は好奇心の塊だ。漂着したことに困ってはいるものの、どこか愉しんでいるようなところがある。

他の三人がどう考えているのかはよく分からなかったが、少なくとも狼狽うろたえたり、悲愴ひそぶったりしている様子はない。

残念ながら僕にはそんな余裕はなかった。

東京を発たつ時には異世界で骨を埋める覚悟もあったような気がするが、いざ帰れなくなると話は違う。

実はもう、かなり帰りたくなっている。

二郎のラーメンを食べ、上野辺りの居酒屋で安い酒で酔っ払いたい。漫画の続きも気になってきた。

地球にいた頃には当たり前前にできたことが、今ではもう絶対に叶わないことになってし

まったのだ。せめてもう一度、あの背脂でぎとぎとのスープを飲みたかった。

生き延びるためには、解決しなければならぬ問題がいくつもある。

幸いにして水と空気は潤沢にあるし、安全についても今のところは問題がない。

差し当たって大きな問題が二つある。一方は言わずと知れた食糧だが、もう一つもこの洞窟で暮らしていく上でかなり大きな問題だった。

蚊である。

異世界の昆虫なので正確には蚊ではないのかもしれないが、ほとんど蚊だ。東京や埼玉で見る蚊の倍くらい大きい。

はじめは数の少なかったこの蚊によく似た生き物は次第に大胆になり、今では洞窟の中にもお構い無しに侵入してくるようになった。そんなところまで地球の御同類に似なくてもいいと思うのだが、刺されるときつちり痒かゆいところは同じだ。

医者である春日は、この異世界蚊もどきに警戒心を示した。

地球でも蚊を媒介とした病気は多い。マラリアや日本脳炎、デング熱に西ナイルウイルス。最近ではジカ熱なんていう病気もある。

異世界の蚊がどんな病気を媒介しているのか分からない内は用心に越したことはない。

どの異世界にも、蚊や蚊に似た生き物はいる。ただ、それほど人間を刺さないことが多いのはその異世界に人間が存在しないからだ。

異世界に地球人が入植するということは、それまでの食物連鎖の中にお邪魔するという
ことでもある。

蚊にも刺されるし、蛭ひらに血を吸われることもあるだろう。運が悪ければ大型の肉食獣に
食われることだってあるかもしれない。

これからこの異世界でも、段々と人間が蚊に刺されるようになるのだろうというのが
異世界生物学者たちの見立てだ。

だが、どういうわけかこの蚊は一味違った。

まるで人間の血の旨味を知っているかのように、地球の蚊に匹敵する貪欲さで血を吸い
に来る。もちろん、防ぎ切ることなんてできるはずがない。

全く刺されないという目標が達成不能だと分かると、春日は「できる限り刺されないよ
うに長袖を着ろ」と厳命した。酷暑の中では不評だったが、医師の命なら仕方ない。

蒸し風呂のような洞窟の中で長袖を着て生活するのは、拷問のようだ。

しかし、この事態は意外にすぐ打開された。

JAWAにも気の利いた人間がいるようで、ありがたいことに物資の中には蚊取り線香
も含まれていたのだ。

最近流行りの吊すつるタイプではなく、昔ながらの火を点ける渦巻き型の奴である。

これさえあれば何とかなるといふ淡い期待があったのだが、意外な問題が持ち上がった。

「まさか誰も煙草たばこを吸わないなんて……」

刺された腕をバリバリと搔きながらオプライエンが嘆息する。

五人の中に、喫煙者はゼロ。

工藤君だけは喫煙経験があるものの、異世界行きを機に禁煙をはじめたという。

煙草が買えなければ自動的に禁煙は成功するから、かなりクレヴァーナ禁煙だと僕は感心してしまった。

ともかく、火がなければ蚊取り線香は単なる緑の渦巻きに過ぎない。

異世界考古学者である馬場さんは、ライターなしでもできる着火方法に精通していたが、結果は捗々はかばかしくなかった。色々と試してみるのだが、この長雨でありとあらゆるものが湿気ているのだ。

蚊に対する対抗手段が全くない時よりも、目の前に蚊取り線香があるのに使えない状態の方がより苦しい。

狭い洞窟の中に蚊柱が立つような異常な状況の中で僕たちは開梱作業を続ける。

この地獄は、工藤君が段ボールの中からチャッカマンを見つけるまで継続することになった。

食糧はなるべく切り詰めようという話も出たが、春日に却下された。

計画的な消費は大切だが、今はむしろ日持ちのしないものをさっさと食べてしまった方

がいいということらしい。

士気を保つ意味もある。腹が減っては戦はできないというのはこの世の真理だ。

まず組上そじょうに上ったのは野菜だった。

代々、日本の入植地での交代式には盛大なパーティを催すのが伝統になっている。

昔は交代直前の入植地は農作物の作況次第では入植地が著いちじるしい生野菜不足に陥おちつていくことがあった。

今でこそモヤシやカイワレ、スプラウトの生産プラントの設置が標準化されているが、そんなものがない時代は不作に陥ればビタミン剤やライムジュースで栄養素を補うことになっていたらしい。大航海時代からこつち、壊血病は常に人類の敵だということだ。

そういう訳だから、野菜は豊富にある。放つておいてもどうせ腐らせるだけなのでこれを消費しなければならなかった。

種苗しゅびょう用の携帯冷蔵庫はあるが、生野菜を保存しておけるほどのスペースは当然ない。

生のまま齧るのは芸がないというので、僕が調理担当に任命された。苦学生時代に飲食店でバイトをしていた経験がこんなところで活かされるとは当時の僕に言っても絶対に信じないだろう。

他にも肉類や鶏卵、牛乳なんかもたっぷりある。洞窟に運び込んだ段階で駄目になっていたものもあるが、それは潔いさぎよく諦めた。そもそも五人では決して食べ切れない量の食糧が

あるのだ。

使える物は何でも使つていいと言われると、逆に献立に困る。工藤君の見つけたチャツカマンのお陰で途中からは火も使うことができようになった。

刺身に天ぷら、サーロインステーキ、芙蓉蟹アヲヨハヒから鶏の手羽餃子ギョウザにカオマンガイとゴーヤチャンプルー。

和食洋食中華からはじまり、持てるレパートリーを次々に披露する。高温多湿のせいで段々と使える食材の幅が減つていくのはなかなかスリリングな経験だ。

お陰で三度三度食事にだけは不自由することがなかった。

好評だったのが丸鶏の中に糯米うるちまいを詰めて焼き上げるローストチキン。

オーブンなんて当然あるはずがないので作るのには難しいかと思つたが、工藤君が荷物の中からダッチオーブンを見つけてくれたので上手うまく作ることができた。

鶏肉の旨味をたっぷり吸つた糯米が堪らない。

肉と糯米の激しい争奪戦になつたので、これだけは二回作つた。

量を作れば味にムラがなくなつて失敗しにくくなるので、僕は基本的にたくさん作るのが好きだ。食べ切れないくらい作つても地球では冷蔵庫に放り込んでおけばよかつたが、ここではそういうわけにもいかないのが難儀した。

特にオプライエンは絶対に食べ物を残さない。

廃棄しないといけない食材については納得してくれたが、料理したものは絶対残そうとしない。だから作る量を慎重に調整しなければならぬほどだった。

好きなものから食べる人、逆に最後まで取って置く人。

五人もいると食べ方もそれぞれだ。

食事一つとっても色々な拘りこだわがあるものだと感心する。

実は食事について大きな悩みが一つあった。

無事に日本へ生きて帰れたとする。もしもロビンソン・クルーソーみたいな漂着記を出版することになったら、このことをどう書けばいいんだろうか。

まさか異世界に漂着してすぐに豪華極まる料理に満腹していたというのは、どうにもお話として締まらない。

帰ってからのことなんて帰ってから考えればいいのだが、狭い洞窟の中では仕分けと料理と大富豪の他には空想を弄ぶことくらいしかすることがないのだ。

そんなことを考えながらジャワ君Tシャツの段ボールを片付けていると、洞窟の入り口の方から工藤君の声が聞こえた。

「雨が止んだよ！」

それはこの十日間、待ちに待った言葉だった。僕たちは洞窟から外に走り出る。

洞窟の外の景色は一変していた。

僕たちのいた洞窟は丘陵の中腹にぽっかりと開いていたようだ。

露に濡れて輝く草原の向こうには瀬戸内海みたいな川幅の大河が流れている。

右手には広大な森林と、雲海を貫いて巨大な山脈が聳えていた。

僕たちの頭上を、見たこともない鳥が滑空していく。いや、本当にあれは鳥なんだろうか。翼竜か何かかもしれない。

緑の地平線に、巨大な虹がかかっている。

僕たちは日本とはスケールの違い過ぎる光景に、茫然としていた。

何もかもが、大きい。

そして、何もかもが色鮮やかだ。

「遺跡だ！」

叫んでいるのは、馬場さんだった。

指差す方を見ると、確かに遺跡がある。これも馬鹿みたいに大きい。

石造りの街並みが森に吞み込まれているのだが、面積が尋常ではなかった。緑の海のようになった森のあちこちから、尖塔や屋根の名残が見えている。

「〈第七異世界〉だ……」

馬場さんの声は、熱に浮かされたようだ。

僕にも分かる。〈第五異世界〉の取材をするために付け焼刃で事前に調べた限り、こんな

規模の遺跡は既知の異世界にはない。

遺跡に駆け出そうとする馬場さんを、オブライエンがしっかりと押さえた。

近くに見えているが、遺跡までは結構な距離がある。森歩きの装備はないし、中にはどんな動物がいるかも分からない。もちろん猛獣がいる可能性だってある。

それにしても、空気が美味しい。

どうして異世界には人間の呼吸可能な空気があるのか、という下らないことを気にしているコメンテーターをテレビで見たことがあるが、そんなことはこの空気の美味さを味わったことがないから言えるのだろう。

胸いっぱい雨上がりの空気を吸うと、ちっぽけなことがどうでもよくなってくる。

JAWAには優秀な技術者がたくさんいるのだ。

きっとすぐに救助はやって来る。それまでここで生き延びればいい。食べ物も、畑を作れば何とかなるだろう。

意外と何とかなるかもしれない。

僕の中の楽観的な部分が、そう囁いていた。

異世界にきて十一日目。僕たちはこの辺りの調査に乗り出した。

畑を作るのに適した土地を探すのが目的だということになっているが、実際には馬

場さんと一緒に遺跡を見に行くことが主な目的だ。

そもそも僕たちには畑に適した土地の良し悪しなんて分からない。

いい土は味が違う、なんて言う人もいるが、そもそもその味を知らなければ無意味だ。

出発するに当たって、五人分のレトルト食品を用意した。おやつもある。

まるで遠足だ。

出発前にコンパスで方角を確かめる。

河岸段丘の草原を大河沿いに西へ向かって歩いていくと、洞窟から小一時間ほどで遺跡の森の入り口に辿り着いた。

荘厳、というべきだろうか。

フリーライターでごはんを食べているというのに、上手く言葉が出てこない。

丁寧に積み上げられた石積みつとに蔦つたが絡まり、木々が生い茂り、街全体を呑み込んでいる。

元は計画的に造られた美しい街並みだったのだろう。東西と南北の条坊に区切られた市

街の跡には、人々が暮らしていた息吹さえ感じられた。

馬場さんは終始興奮した様子で写真を撮ったり帳面にメモをつけたりしている。

「この遺跡は人が住まなくなつてから、まだあまり経っていないんじゃないかな……」

ボールペンの尻で耳の後ろを掻きながら馬場さんが呟く。

樹々の緑きざに覆われてはいるが、確かに石造りの建造物はそれほど劣化していない。

この辺りの気候は亜熱帯かそれに近い気候のようだから、植物が繁茂するのが速いのだろうというのが馬場さんの見立てだった。

「まさか、異世界人なんていませんよね」

心配そうに尋ねるのはオブライエンだ。身体は一番大きいのだが、少し心配性なところがある。

「もし会えたら世紀の大発見だな。これまでに異世界人と接触した地球人はいないから」
そう答える馬場さんの目は少年のように輝いている。

事実、これまでに異世界人と接触したという公的な記録は存在しない。

アメリカ軍が〈第一異世界〉で捕虜にした異世界人をネヴァダ州のエリア51に監禁しているとか、フェニキア人の子孫が異世界で生存しているという手掛かりがヴォイニツチ手稿に記されているとかいう与太話は枚挙に暇がないが、それらは全て特殊な趣味を持つ人々が定期購読する月刊誌でしかまともに相手にされていない。

遺跡はあるのだから誰か一人くらい生き残りはいないのかと現在も調査は続けられている。しかし、これまでに発見された遺跡は全て数千年から数万年前の物だった。

最も新しい物でも、地球でいえば中国奥地の三星堆遺跡と同じくらい古い。年代というと紀元前二〇〇〇年くらいに当たる。

今のところ、既知の異世界で異世界人と遭遇する可能性は低いと言われていた。

「もし異世界人を見つけても不用意に接触しないで下さいね」

大荷物を背負って歩いている春日の口調はきつぱりとしていた。

実は、異世界人と遭遇した時のマニュアルがあるのだ。どこかの誰かがいずれ必要になるに違いないと気が付いたのだ。大航海時代の失敗を繰り返すべきではないという精神は立派なものだ。

但し、マニュアルの知名度は恐ろしく低い。

普通の人間はそんなものがあることも知らなければ必要だとも思わないということだろう。僕も異世界行きに備えて講習を受けるまでそんなものが存在するということさえ知らなかった。

I A A（国際異世界接続アカデミー）によって決議された「行動規定」は全部で九ヶ条からなっている。

異世界由来的生命体、つまり異世界人と接近遭遇した場合の大まかな指針と通報の手順が定められたこの行動規定は講義の確認試験でも執拗しつように出題されていた。

異世界人との不用意な接触を禁じている理由はいくつかある。独自性のある文化の保護や不慮の事態からの戦争を避けること。そして何より、病気だ。

そもそも異世界に行くということそのものが未知の疾病への感染リスクを孕はらんでいる。

〈第五異世界〉行きのために打たねばならなかった予防接種は七種類。前にアフリカ取材

の時に打ったよりも多い。

仮に異世界人というものが存在したとすれば、地球人がまったく抵抗できない未知の病原体を保菌している可能性は十分にある。

かつて中南米のインカやアステカが白人の持ち込んだ病によって急激な人口減に曝さらされたのと同様の愚は避けたいというのが、I A A 行動規定の基本理念だ。

逆に、異星人から感染した病原菌が原因で地球人類が滅亡するという可能性もある。むしろそちらの危惧の方が大きい。だからこそ、異世界へ行く人間よりも帰ってきた人間の方が嚴重な防疫措置を施されることになるのだ。

そもそも、この遺跡を造った人々は僕たちと同じ人間型なんだろうか。

異世界人の想像図にはタコ型やグレイ型なんていうものもある。大きさもチンパンジーくらいの大きさから巨人説まで色々であった。伝説上の小人や妖精は異世界人だと信じている人たちもいる。

僕の心配に気付いたのか、馬場さんが建物の戸に背中を付け、身長を計るように頭の上に掌を乗せて見せた。

「少なくとも背の高さは私たちとほとんど変わらないみたいだね」

そう言われてみると、確かにそうだ。扉の高さが地球のものと同様でないのなら、少なくとも背の高さは似たようなものだということになる。

遺跡を歩いているだけでも、分かることはいくつもあった。

例えばこの遺跡に暮らしていた異世界人は、明らかに文字を持っている。

商店風の建物の看板に記されている規則性のあるパターンは明らかに文字だ。

文字の形は複雑で数百種類以上あるから、表音文字ではなく漢字のような表意文字なのだろう。

馬場さんはこの異世界文字を見る度にパシャリパシャリとポラロイドの写真撮っていた。本当はじっくり調査したい様子だったが、今日はあくまでも探索が目的だ。

僕も遺跡に入ってからシャッターを押し続けている。

本当に地球に帰れるのか怪しいものだが、もし帰ることができればここでの写真はとても貴重な資料になるはずだ。

前人未到の〈第七異世界〉の巨大遺跡の写真となれば欲しがる編集部はいくらでもある。

この写真だけで上手くすれば数年食い繋げるかもしれない。そのためにも救助が来るまで何としても生き延びねばならないが。

石畳の道を歩いているとどこからか鳥や獣の鳴き声が聞こえてくる。

長閑のどかな空気の中を、五人はゆっくりと進んで行った。

それにしても暑い。歩いているだけでシャツが張り付くほどの汗が噴き出してくる。

こう暑いとキンキンに冷えたビールが飲みたくなるが、叶わぬ夢だ。

遺跡都市には東側から入ったが、北西へ進むにつれて段々と様子がおかしくなってきた。「……北側は崩れているのか」

馬場さんのシャッター回数が增える。

都市の形がほとんどそのまま残っていた南東側と違い、中央から北側にかけては建物の破損が酷い。崩れ方を見ると、颱風たいふうや地震といった自然災害による倒壊ではなく人為的に破却した跡のようだ。

更地に戻そうと丁寧に解体したというわけではない。

乱暴に打ち壊された無残な建物がずっと続いている。その跡も、森の緑は分け隔てなく包み込んでいた。

遺跡都市の中心部で崩れた望楼跡ぼうろうを検分し、午前中の調査は終了ということになった。中央の広場近くを流れる水路で水を汲んで簡単な昼食を摂る。

「この街は上水道と下水道の両方をちゃんと完備していたんですよ」

職業柄、オブライエンはそういうことに目が行くのだろう。上水を流す水路がほんの僅かな高低差で流量を調整しているということを訥々とつとつと語ってくれる。

専門的な話はさっぱり分からないが、異世界の水で淹れた珈琲の方はなかなかいいけた。

異世界入植の最大の敵は自然だが、二番目はホームシックだという。

入植者のストレス解消のため、嗜好品しこうひんの準備には細心の注意が払われる。

強力な送受信設備と簡易の世界窓がなければ地球との通信も覚束ない環境では、嗜好品の存在は馬鹿にならない。

回収した段ボールの中にも、珈琲や紅茶、果物の缶詰、砂糖なんかがつぷり入った段ボールが含まれていた。

もちろん、煙草もある。ピースからセブンスター、メビウスにピアニッシモまで各種銘柄を取り揃えてあるが、この五人にとっては宝の持ち腐れだった。

工藤君だけはたまに恨めし気に煙草の段ボールを見つめていたが、鋼の精神で耐えているようだ。チャツカマンを管理しているオプライエンにも絶対に火を渡さないように頼んでいるらしい。

お湯で温めたレトルト食品で簡単な昼食を済ませると、あとは洞窟に帰るだけだ。

「行きと違う道で帰っちゃ駄目かな？」

馬場さんはそう提案したが、他の四人が却下した。

大型の獣がいなくても限らないというのが大きな理由だが、何にでも興味を示す馬場さんが少しでも珍しい物を見つける度に歩みが止まることに嫌気がさしていたということもある。

夕暮れまでにはまだ時間に余裕はあるが、この遺跡の中で夜を迎えることだけは絶対に避けねばならない。

ちなみに、洞窟の中での十日間にこの五人のリーダーは馬場さんだとすることに決定していた。

緊急時には明確なリーダーがいた方がいいというのは五人の共通した考えだ。

異世界への入植でも、明確なリーダーを決めていなかったために判断が遅れて危機に陥ったという例は事例集に纏められている。

馬場さん本人は固辞していたが、最後にはしぶしぶ受け入れてくれた。

年齢が一番上ということもあるが、皆が馬場さんを推した理由はその勘のよさだ。

カードゲームをする時も段ボールの開梱をする時も、馬場さんの勘は妙に冴さえていた。

普段は何かあれば民主的に話し合っあって対処するが、非常時には馬場さんが強権を發動できるといふルールになっている。

さすがに帰り道を選ぶためだけに強権を發動するつもりはないようで、馬場さんも元来た道を帰ることに同意した。

緊張していた行きと違い、帰りは風景を楽しむ余裕もある。

長雨が終わったからか、石畳を割って生える草にも小さな花が咲いていた。

どうにも不思議な気分だ。

ここで見る景色、動物、植物。その全てが、まだ地球人類の見たことのない物なのだ。あれを見るのも人類初。これを見るのも人類初。もちろん、名前もまだ付いていない。

子供の頃から空想科学小説を愛読していた僕にとっては夢のような時間が過ぎていく。

先頭を進む工藤君が不意に立ち止まったのは、道程も半ばを過ぎた頃だった。

「……何かいる気がする」

「何かって何です？」

尋ねるオプライエンの言葉を、工藤君は人差し指を立てて遮った。

やはり何かいるらしい。

道端に落ちていた手頃な長さの棒を掴み、工藤君は抜き足差し足でゆっくりと建物の陰に近付いて行く。

それに倣^{なち}って僕も手近な石を拾った。相手が猛獣なら何の役にも立たないだろうが、何もしないでいられるほど冷静でもない。

物陰に潜んでいるのが大型の肉食獣でないことを僕は祈る。

昔、名古屋の東山動物園で見た虎^{とら}を思い出した。あの大ききの獣に出会ってしまったら、逃げることなんてできないだろう。

緊張に唾^{つば}を飲む。

どこで鳥が啼^ないた。

鼓動がやけに大きく耳に響く。嫌な汗が首筋を伝った。

後、三步。

こんなところで死んでしまったら、誰が岐阜の両親に伝えてくれるというのか。いや、両親は事故の段階でとつくに諦めているに違いない。

出発前に遺書を預けることになっていたが、何を書いたか思い出せなかった。

多分、実家の猫によるしくとか、そういうことを書いたのだろう。仮にも文章を書いている人間の遺書としては最悪の部類に入る。辞世の句でも詠んでおけばよかった。

先輩はどう思うだろうか。

自分の譲った仕事で僕が死ねば、少しでも悲しんでくれるだろうか。

我ながら女々しい考えだと自嘲する。

多分泣いてもくれないだろう。先輩が嘆いたり悲しんだりしている姿が、僕にはどうしても想像できない。

後、二歩。

隣に立つオブライエンも固唾を呑んで見守っている。

後、一歩。

何かが建物の陰から飛び出してきたのは、その時だった。

小さい。

飛び出したそれはこちらに背を向けて逃げようとする。が、けつまずいてこけてしまった。

人間の子供くらいの大きさだ。

いや、違う。

それはまさしく、人間の子供だった。

続きは書籍版でお楽しみください。

[『第七異世界のラダッシュ村』出版物ページはこちら](#)